

いのちの水

二〇一六年

十二月号

六七〇号

主があなたの永遠の光となり、
あなたの嘆きの人々は終わる。

(イザヤ60の20より)

目次

- ・単純さのなかに秘められたもの 一星の輝き 1
- ・キリストに導くもの 2
- ・神様、なぜですか ーヨブ記から 5
- ・感謝の献げものを ー詩篇50篇 7
- ・旧約聖書の続編から 11



単純さのなかに秘められたもの

一星のかがやき

「この世界では実に多様なものがある。人間が造り出した建造物、芸術作品、そして動植物にも無限の多様性というのがある。

そうした複雑きわまりないこの世界の見えるもののうち、最も単純にしてしかも最も深い美をたたえたものーそれが星である。

冬を迎えて夜空は澄み渡り、さらに一年で最も明るいさまざまの星が見える季節となった。

とりわけこのところ、夕方には金星、明け方には木星がその強い光をなげかけていて、一層そうした星々に心惹かれ

る。

星は外見的には、その輝きも色も単純そのものである。しかし、そこには真実、善きもの、そして美そのものが深く秘められている。

地上でいかなることが生じようとも、星の単純で深淵な美しさや清い輝きを汚すこともない。

その姿は、私たちに人間の持ち得ない真実を指し示している。

きのつも今日も、そして明日も同じように輝き続ける。

それは「イエス・キリストは、きのつも、きょうも、いつまでも変ることがない」というみ言葉を思い起こさせる。

(ヘブル13の8)

数千年もその清い光を放ち続けるその姿ーそれは、人間の

言葉や行動、その心の中にはさまざまの汚れ、罪があり、闇があるのに比べて、全く異なる世界のものを暗示している。

完全な善きものーそれは光そのものであり、常にその光を放つものである。

神はこの暗黒と混乱の世界に光あれ！と言われ、それが聖書全体の内容を指し示すものとなっている。

このように、最も善き存在である神は、光を与える存在として最初に記されている。

「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつ」(ヨハネ8の12)

沈黙しつつ、雄弁であり、何の変化もないが、しかも見る人に良きものを与え続ける。

私たちがひとたび霊的な世界のことと結びつけて見るとき、あの星の光は、そうした聖書の最も重要な光のことを内に

秘めて輝き続けている。

キリストに導くもの

キリストが誕生したとき、はるか一〇〇〇km以上も離れたいたと思われる地域から、三人の知性ある人たちが、砂漠地帯を越えてはるばるキリストの誕生への祝いものを持ってきた。

そしてひざまずいてイエスを拝した。(マタイ福音書二章)

彼らは星によってキリストの誕生を知らされ、また星によってキリストの誕生の場所へと導かれたと記されている。

そして生まれたばかりのイエスに礼拝を、心を捧げた。それほど、彼らにとってキリストは絶大な存在として啓示されたのがつかえる。

しかし、このような記述はあまりにも現実離れして子供向けのおとぎ話のように思ふ人は多いであろう。

しかし、単なる子供向けの話は決して聖書には載らない。

「こつした一見子供向けの童話にも出てきそうな内容が、ひとたび霊的な世界にかかわっていることを知るときには、さまざまのことが暗示されているのに気づかされる。」

「こつした星によって知らされ、星が導いてキリストのところへ連れて行く―これは、何もキリストに関して古代に一回だけ生じたことでない。

それは、キリスト以後、無数の人たちに生じてきたことである。

私自身もまた、たしかに一冊の本のあるページが、キリストのことを知らせる星のような役目を果たしてくれた。

そして、キリストへとその小さな本が導いてくれた。

書物もまた、星となりうる。

三人の東方の賢者たちは、彼らにとって最も大切な黄金、乳香、没薬といったものをはるばる携えて、キリストに捧

げた。

途中の砂漠地帯で砂嵐や追剥などにあつてそのような宝物を略奪されるかも知れないし、命も奪われる可能性も高い。それにもかかわらず、彼らはキリストのもとへとそうした宝をもって星に導かれてきた。

キリストの不思議な力はすでに誕生のときから発揮されているのを示すものである。

人間の最も大切にするものを、捧げようとするほどに、キリストは絶大な力を及ぼしている―それは現代までの二千年間、無数の人たちにそうした力を与えてきた。

私たちもまた、キリストのことを知らされ、私たちのうちにキリストが生まれてくださるとき、キリストが最も大切なものを私たちにくださったことを知る。それとともに、

私たちもまた、自分が一番大切にしているものを捧げようという気持ちへと導かれる。

今も、目には見えない星がかがやき、キリストがあられることを指し示し、またキリストのもとへと導こうとされている。

私たちも、その光を受け、その導きを魂の内なる星―キリストに必ず受けて日々を歩めるようでありたいと思う。

キリストの記念―クリスマス

12月、誰もが知っているクリスマスは季節である。しかし、クリスマスとは何であるのか、ということとは、辞書の説明を見ても必ずしも明らかにはされない。

大型の国語辞典でも、単に、キリストの誕生を祝う祝日といった記述でしかない。

クリスマスとは、Christmasであり、キリスト Christのミサ mass という意味である。それは言い換えると、キリス

トへの礼拝である。私たち汚れた人間のためにこの地上にきてくださったキリストに感謝を捧げ、そのキリストから新たな力を与えられるようにと祈り願う日である。

一般的な誕生日のお祝いは、その日に生まれた人に「誕生日おめでとう」と言う。

しかし、クリスマスは、同じ誕生の祝日とはいえ、キリストに向っておめでとうなどということではない。

キリストが地上にきてくださり、最も弱い者を愛し、ここにきてくださり、新たな力を与えてくださる―そのことを記念することである。

人間の根本問題―それは心の問題であり、どうしても正しい道を歩けないという弱さであり、それを罪と言っている。その根本問題である罪をゆるし、罪からの清めを与え、さらに新たな霊―聖霊を与えられることである。

記念する―それは、その漢字のとおり、心に(念)、記す

ることである。

そしてこの記念するとは、覚えておく、繰り返し思いだす、ということでもある。

聖書には、かつてエジプトからモーセによって導かれた民が前は海、後は敵兵―絶体絶命という状況のとき、神の力が臨んで、海が開け、道となって人々が通って救われたという驚くべき記述がある。

それをイスラエル民族は、以後数千年にわたって記念しつづけてきた。現在でも同様である。過越祭というのは、滅びるところであった民族に災いが過ぎ越した、滅びから救いだされた記念として行なわれてきた。

現在でも、イスラエルの人たちは、過越祭を最も重要な祝日として守り続けている。

最も重要な記念日、それは滅びから神の力によって救いだされた日である。

現在、世界の多数の国々では日曜日は休みとなっている。それはなぜなのか。その理由

もまた、日本人には、ほとんど知られていないのは不思議なほどである。

日曜日を休むようになったのは、キリストが十字架で処刑されて三日目に復活したのが日曜日だったからである。その記念として仕事を休んだのであった。

てこのように、キリストが復活した記念日が、日曜日としてこれも世界的に行なわれている。

「記念する」ということがいかに重要なことであるのか、この日曜日の世界的に当たり前となっていることを考えてみるとそのことがよくわかる。

死者に対して、その死後も死者を心に刻むこと―記念すること―こそ、大切なことだ。他方、仏教・神道などでは、死者に対して慰霊とか鎮魂という言葉を用いるが、慰霊とは、以前に書いたように、霊を慰めることであり、それは、死者の霊が悲しみ、苦しみ、あるいは恨み、怒っている―

ということが前提となつている。

もし死者の霊が、喜び、平和の状態にて満足しているなら、そのような霊を慰める慰霊ということとはまったく無用のこととなる。

鎮魂も、死者の魂が、怒り、荒ぶっている、復讐心に燃えている等々と見なされるから、それを鎮める必要がでてくる。

それが鎮魂である。鎮とは、金属の重しで圧するということである。(鎮圧、鎮痛、鎮火などの用例でもうかがえる) 慰霊という言葉は、日本では特に新聞、テレビ等々でもよく見られる。

しかし、意外なことであるが、「慰霊」という言葉に対応する英語は、何種類かの和英辞典―ウィズダム和英辞典、コンサイス英和英辞典、デイリーコンサイス英和英辞典などにも、掲載されていない。

大型辞典ではどうか。グランドコンサイス英和英辞典は、二五〇〇頁を越え、和英辞典

では最大級の、見出し語・複合語・派生語21万項目、用例11万項目の辞書だが、それにも、「慰霊」という言葉の英語は掲載されていない。

それは、英語が用いられる世界では、慰霊という觀念がなにか、あるいは乏しいことを示している。

重要なことは慰霊でなく、「記念」つまり記憶にとどめる、ということである。

一般の人々についても、たとえ事故、災害などで死んだ人であつても、死後は安らかにいるかも知れないのに勝手に苦しみ悲しんでいるなど、みなすことは死者に対して本当に好ましい姿勢といえるであらうか。

良き人には災害や事故で死んでも良きことが死後は待つていると想像される。

しかし、どの人が真によき人であつたのか、それは人間が正確に判定などすることはできない。心の深いところにある心はただ神のみが知るから

である。

それを人間の想像で悲しんでいるとか苦しみ続けている、怒っているなどとしてその霊を慰めるといふ不確定なことをするのでなく、死という現実を覚え、そこから良きものをくみ取ること―真の意味で記念することこそ重要である。

戦争でなくなつた人を記念するとは、その人たちのような悲劇が生じないように覚え、なぜそんなことが生じたのかを思い起こし、そのような間違ったことが起こらないようにという気持を新たにすることであり、個人的には生きていたときのよきことを思い起こすことでもある。

悪しきことなら、そのことが起こらないようにと覚え、良きことなら、そのことがさらに自分の世代や次の世代に、広く行なわれるようにと覚えること、さらには祈ること―それが記念することである。

慰霊や鎮魂といったことは、

死者の魂が何十年でも、苦しみ、悲しみ、あるいは、怒っているという前提であるが、そのような前提はまったくまちがひであるか、分らないことを地上の人間が勝手に想像しているかである。

キリスト者であれば、死んでなお怒っているとか、泣いているなどということはあり得ない。

キリストのような完全な姿へと変えられるということだからである。

クリスマスを迎えるにあつて、その言葉どおり、キリストへの礼拝を捧げたい。そしてその礼拝によつて新たな力、復活したキリストの命をゆたかに与えたいと願う。

記念することは、覚えておくこと、またそれと深くかわつていること―思いだすということである。

キリストを思いだす、それはキリストを信じてから新たにされた人たちが、そのキリストに導かれて作つたバツハの

ような音楽家の大いなるはたらき―それをも思いだすことにつながる。

今年は一〇一六年―それはキリスト降誕からおよその年月である。ここにもキリストを記念するということが、世界的に、今年は一〇〇年ということをお思いだすたびに、キリストの誕生からの年を思いだすことで、キリストの記念となる。

キリストが十字架にかけられて、私たちの罪を身代わりになつてくださった、そして他のいかなる方法によつてもできなかった、罪のゆるし、そこから新たな力が注がれることになつたゆえ、十字架がキリストの記念として、世界中で用いられるようになっていった。

さらに、聖書全体が、キリストを記念する大いなる書物だということになる。旧約聖書もキリストを指し示すのが本質であるゆえ、旧約聖書も新約聖書もみな、キリストを記

念するー思いだす、覚えておくことにつながっていく。

聖書の詩にも、神のお心の現れであるそのみ言葉をつねに心にとどめておくことの幸いが次のように記されている。

…いかに幸いなことが
主の言葉を喜び

み言葉を昼も夜も心にとどめる人は！

その人は、流れのほとりに植えられた木のように

時が来れば実を結び
齒もしおれることがない。

(詩篇第一篇より)

神、なぜですか

ーヨブ記から

この世にあって不可解なことはいくらでもある。この世界を創造し、支配しているのが正義の神、真実の愛の神であるのなら、どうしてこのようなことが起こるのかーということ、はるかな古代から現

在に至るまで、日常的に生じている。

それゆえに、そのような神は存在しないのだ、あちこちにいわば無秩序に何か不可解な力を持つものがあるーそれを神々として崇めるのが世界中でなされていることだった。

そのようなただなかに、この世界を創造された神は唯一であり、しかも現在も愛と真実をもってこの世を治めておられるということとを真理だと確信する人たちも起こされてきた。

しかしそうした人たちも、簡単に神の正義や愛の支配を信じ続けることができたのではない。

「神はどこにいるのか！」

という切実な叫びは、この世に満ちているゆえに、聖書の中にもしばしば現れている。

聖書は単なる理想や人間の想像でなく、事実を深くかつ鋭く述べているゆえである。

そのような人生の深刻な魂の

戦いに関して詩的表現で記されているのが旧約聖書のヨブ記である。

ヨブという人物は、豊かであり、かつ常に神を忘れず、息子たちの罪の赦しを神の前で祈り願う生活であった。

そのような彼に、突然息子も殺され、財産も奪われるという悲劇が襲ってきた。

さらには、自分の健康も損なわれ、激しい苦しみにさいなまれるという事態になってきた。そうなった上、妻からも神をのろって死んだらしいのだ、というような侮辱的な言葉をうけるほどになった。

そしてもう、自分がこの世に生まれてきたことを強く呪うという事態にあった。

そうした状況にあって、3人の友人が訪れ、ヨブを慰めようとした。そして苦しみやさなかにあるヨブと長く、はげしいやりとりがなされた。

なぜこんな目に遭うのかというヨブの叫びに対して、それ

はヨブの罪ゆえだというのが友人たちの主張であった。

しかし、ヨブはどうしても自分がそのような苦難をうけるほどの罪は犯していない、私は正しく生きてきたーと繰り返し反論した。

そして双方が議論の応酬に疲れ、どちらの答えも延々と続いて果てしかなかった。

そのようなとき、突然現れたのがエリフという人物だった。(ヨブ記32〜37章)

その名も、エリ(神)、フー(彼)から成り、「彼は神」という名前である。その後神がヨブに語りかけたとき、4

2章の7節で「お前たち3人は正しく語らなかつた」と言われたが、エリフのことは一

言も述べていない。38章でも神はエリフに答えたのではなくヨブに答えられた。エリフと言うのはこのように、

神秘さをたたえた存在である。神は、長い沈黙ののちに、

最後にようやくヨブに語りか

けるが(ヨブ記38章)、自然の素晴らしさや神祕を言われ、そうしたことが分かっているかと言われるが、エリフの言葉は神の言葉と共通点を持っており、神の言葉への橋渡しとなっている。

ヨブ記35章4節、5節に「天を仰ぎ見よ、雲を見つめよ」とある。自然を深く見つめることの人生が示されている。主イエスも「野の花(百合と訳されている事が多い)を見よ、空の鳥を見よ。」と言われた。

単に雲の動きを見るだけで、深い暗示を得ることができるといのである。神は力強く、英知に満ちている。その英知によって、神の言葉に立ち返って耳を傾ければ幸いを与え、それを無視し続けるならば滅びていくという一種の法則を述べている。

神は、苦しみによって、そこから救いに導こうとされる。神に対して罪を犯したことを知って、心が砕かれることで

導かれていくのである。

26節からは「なぜ自分だけこのように苦しみがあるのか分からない」ということへの応答として、神は大いなる自然を持って啓示しておられるということが書かれている。

人間の意見や思いではなく、神の直接の力の表れとして自然がある。雨、雲、雪、氷、雷鳴などが書かれており、雷鳴については特に詳しく書かれている。神の悪に対する怒りの気持ちをあの音と光にこめられているとある。

様々な自然現象は、大地のためにも、恵みのためにも与えられているだけでなく、人間への大いなる警告と教えのためにも存在していると記され、大きな視野から起こされている。

雷の光や音が人間にどのような意味を持つか。科学的でなく、霊的な意味となると誰も極めたとは言えない。

ヨブ記37章の21節、今、光は見えないが雲の彼方で輝い

ている。金色の光が差し出てくる。全能者の全貌を見出す(極めつくす)ことは私たちにはできない。私たちの理解を遥かに超えている。

「自分になぜこのような大いなる苦しみが来たのか」それはどんなに考えてもわからない。そこから神がエリフという人物を通し、さらに神ご自身が語ったこと―それはこの自然の世界の無限の神祕を思うとき、それらすべては深い謎に満ちている。小さな一つ一つの自然の姿―私たちの身の回りでも植物の葉の一つ一つの形、とげや細毛、花びらの形や色、とうとう動物や昆虫の模様や生態―すべてなぜそのような姿でなければならぬのか、葉の一つ一つの鋸歯(ぎざぎざ)をとっても、

丸いのもたくさんの鋸歯のもの、表面がなめらかなもの、厚い葉、薄いもの、実に千差万別であるが、そうした小さいは謎にみちている。そのような葉の鋸歯―それがなく

と生きていくためにも何も支障がないにもかかわらずなぜそのようなおびただしい多様性があるのか―そんな身近な植物のこと一つとつても無限の神祕がある。それゆえ、私たち人間に不可解なことがあるのは当然なのである。

神は無限大であり、その神に比べるなら人間は限りなく小さい。数学者、物理学者であったパスカルは、神の無限大に比べるなら、いかなる有限も厳密にゼロになると書いた。

私たちは、知識や判断、また善への力等々、人間の弱さ、卑小さを深く知り、神の無限の大きさ、深さを知らされ、それゆえに、そこから私たちに降り注ぐ困難や苦難の理由がわからなくとも、神の導きに信頼するという道が示される。

キリストが言われているように、聖霊が与えられて、初めて全てが教えられて分かるのである。

感謝の献げものを一詩篇 第50篇

この詩は正しい礼拝のあり方を示す内容をもっている。

聖書は、人間の正しいあり方を一貫して指し示す書である。

そしてそれゆえにその正しい道から絶えず大きく離れてしまふ人間の罪をも繰り返し指摘してそこから立ち返るよう

にとのみ言葉を与え続けている。

そしてそのような道からはずれた私たちに、求めることによつて神の力が与えられる恵みが備えられていることも同時に繰り返し述べられている。

この詩も、そのような内容をもっている。イスラエルの民は本来、人間の正しい道を示されている。にもかかわらず、繰り返しそこから離れ、あるいは背き敵対している状態である。

神はその民を愛するがゆえにそのまま放置されず、厳しい

警告を与える。

火の力を持つ神

： 神々の神、主は、御言葉を発し、()

日の出るところから日の入るところまで地を呼び集められる。

麗しさの極みシオンから、神は光を放たれた。

わたしたちの神は来られる、黙してはおられない。

御前を火が焼き尽くして行き、御もとには嵐が吹き荒れている。

(1-3節)

(*)「神々の神、主」…原文は、エール(神) エローヒーム(神の複数形) ヤハウエ

となつている。エローヒームは、単に神とも訳されるが、ときには、力強い、激しい(Mighty)とも訳される。(創世記30の8など)

それゆえ、この箇所も、「力ある神、主」とも訳される。英語聖書では、次のような表現となる。The Mighty

One・God・the LORD (NIV他)

一読してよくわかる一といった内容ではない。現在の私

ちの生活とは何かかけ離れているような言葉がならんでいく。

しかし、これは今から数千年も昔の、日本とははるかに離れた地理的にも全くことなる状況に生きた人の表現であることを思う必要がある。

こつしたなじみにくい表現の奥に何が言われようとしているのか、現代の私たちに何を投げかけているのかを学びたいと思う。

この詩の冒頭でこのように、神の力強さをまず強調し、そして、全地を呼び集めるといふ壮大な語りかけから始まっている。

何のためなのか。それは次にあるように、神の民であるイスラエルの人々の間違つた宗教的状况を裁き、強い警告を与えるためである。

神は、当時エルサレムの一つの場所に過ぎなかつたシオンに現われた。エルサレムは山の頂上部にある町で、その一角にシオンがある。

なぜそんなところが麗しさの極みと言われているかという

と、神のおられるところは最も美しいからである。神こそは、あらゆる美しいものの根源であり、完全な美そのものだからである。

人間もついで、例えば、マザー・テレサの晩年には高齢となり、顔はしわだらけであつても、神と結びついているゆえ、独特な美しさが出てくる。内なる美しさを持つている場合は、年を取つても変わらない。

そしてシオンに皆を呼び集めたのは何のためか。それはイスラエルの民を裁くために、自分の民がいかに間違つているか、真理は何なのかをはつきりするために来られた。

火が焼き尽くすとか、風が吹き荒れているというのは、神が悪を滅ぼす力を持つてくるということを詩的な表現で言っている。

聖書においては、神は岩であるという表現はしばしば現れる。(*) 強固なお方という

表現はしばしば現れる。

(*) 強固なお方という

ことや、神の御前には火があり、の悪を徹底的に焼き尽くすというお方としてもしばしば描かれている。

(*) 主は命の神。わたしの岩をたたえよ。わたしの救いの岩なる神をあがめよ。(サムエル記下 22:47)

私たちが悩まされるのは、悪の力であって、私たちの内や社会、国にも入り込んで悪によって世界が苦しむ。現在の日本や世界の状況を知るほど、悪の力、闇の勢力が次第に広がっていく気配が濃厚で、この傾向が進んでいくとき、これからの世界の前途はどうなるのであろうかーと不安が増してくる。

しかし、悪の力がこの世界の最終的な力ではなく、このように焼き尽くす火のような力をもった神が、神の御計画に従って必要なときに来られる。この詩の作者はその神がこのように宣言された声を聞き取り、感動し、この詩に残した。

神が火のような力をもっていうのは、新約聖書でも受け継いでいる。

・その方は、聖霊と火であなただちに洗礼をお授けになる。(マタイ三・11)

これは、キリストの先がけとなった洗礼のヨハネが、キリストに関して言った言葉。キリストは悔い改める者に対しては、聖霊というこの世の最高の賜物を与える方であるが、他方、悔い改めようとならない者に関しては、火でたとえられるような力をもって裁かれる、そして清めるお方であるーということである。

また、神は悪に対して最終的にどのようにされるか、次のように記されている。

：私たちは御国を受けているのだから、感謝しつつ、畏れ敬いつつ、神に仕えていこう。実に、私たちの神は、焼き尽

くす火である。(ヘブル書12の28、29より)

また、神のおられるところは、火のようなものがあり、火の川が神の御前から流れ出ている。(ダニエル書7の9、10より)

こうした神の厳しい本質は、なにか親しみにくい、愛の神とはまったく異なるように思われる人も多い。

しかし、私たちにとっての根本的なさいわいとは何だろうか。それは自分の心からも周囲の人たちや日本、世界の人々のなかから悪が滅ぼされることである。悪人が滅ぼされるというのでなく、悪人とされる行動をしている人たちそのものは滅びるのを願うのでなく、その人たちの心が変えられるようにとの祈りが一番重要。

その悪人のうちにある悪そのものが神の火と言われる力

によつて焼き滅ぼされることを願う。

このように、この詩篇の言葉は一見私たちには関係のないように見えるが、よくその言葉を見つめていくとき、私たちに身近なものとして近づいてくる。私たちの個人的経験においても、何かよくないことをしたり、言ったりしたときには、何らかの裁きがあると感じている人たちも多いであろう。それは他者には分からないことが多いが、はつきりとこれは裁きだ、と直感的にわかることがある。

形式的宗教への裁きと本当のあり方

：「わが民よ、聞け、わたしは語る。

イスラエルよ、わたしはお前を告発する。

わたしは神、わたしはお前の神。

献げ物についてお前を責めは

しない。

森の生き物は、すべてわたしのもの、
山々に群がる獣も、わたしのもの。

世界とそこに満ちているものはすべてわたしのものだ。

わたしが雄牛の肉を食べ、雄山羊の血を飲むとでも言うのか。

感謝を神へのいけにえとしてささげ、

いと高き神に満願の献げ物をせよ。

それから、わたしを呼べ。苦難の日、わたしはお前を救おう。

そのことよってお前はわたしの栄光を輝かせる。(7、15より)

(*) 新共同訳では、「告白を神へのいけにえと」と訳されている。しかし、告白と訳された原語は、トイダーであり、「感謝」を意味する。それゆえ日本語の他の訳(口語訳、新改訳、関根正雄訳)もすべて「感謝」と訳しているし、外国語訳も同様である。 Offer to God a

sacrifice of thanksgiving (RSV)

Present to God a thank-offering
!(NET)

新共同訳においても、この語はほかの箇所では、「感謝」と訳されているにもかかわらず、この詩編50篇だけは、「告白」と訳している。

このように、当時の神への礼拝において捧げるものは動物の肉や血であった。それが当たり前として行なわれていた時代であるが、その際の心構えというものも、まったく神への大切なことを欠いていた。

：神は背く者に言われる。

「お前はわたしの掟を片端から唱え、わたしの契約を口にする。どういっつもりか。」

お前はわたしの諭しを憎み、わたしの言葉を捨てて顧みないではないか。

盗人と見ればこれにくみし、悪事は口に親しみ、欺きが舌を御している。

座しては兄弟をそしり、同じ母の子を中傷する。(16)

20より)

この詩の作者が神から示されたことは、さまざまの動物はいまさら神に捧げる必要はない、もともといつさいの動物はみな神のものだからである。

そのようなことをしても何ら、人々の心は変わることなく、腐敗したままである。

神が人間に求めるのは、そうではなく、感謝の心だといふのである。神は生きた神であるゆえに、人につねに何か良きものを提供し続けておられる。そのことは私たちが魂の目を開くほどわかつてくる。そこから神への感謝が自然に生まれる。

そのような心からの感謝の心こそが、神への最善の捧げ物だと言われている。

こうしたことは、次のように他の詩においても歌われている。

：神よ、あなたに誓ったとお

り、感謝の献げ物をささげます。(詩編56の13)

：感謝の献げ物をささげて主に歌え。立琴に合わせてわたしたちの神にほめ歌をうたえ。(詩編147の7)

神への感謝の重要性、それが神に喜ばれること―これは人間関係からも類推できる。

私たちが誰かに何かをなすべきことをしたり、与えたりしても、全く感謝しない者もあれば、小さなことをずっと覚えて感謝をあらわす人もいる。

自分自身、親から生まれ落ちたときから数知れないさまざまなことを受けておりながら、いかに感謝を表すことが少なかったかを思いだす。同様に、ほかの人間関係にあつても、同様で私たちは、自分になされた良きことを簡単に忘れてしまう。

あるいは覚えていても、当然のこのように思ってしまう感謝を怠る。

こうした状況は、自分がやつ

ただ、自分の努力や能力で
できているのだ、という自分
中心の、狭く高ぶった考えが
あるからだ。

自分の弱さや罪を知るとき、
そして自分のそうした弱さに
もかかわらず何かができとい
るのは、さまざまの人たちの
おかげであることを知ってい
るとき、感謝は自然に生まれ
る。

このように考えるとき、私
たちの自分中心、すべてを配
慮されて導く神が見えないゆ
えに、人にも神にも感謝をし
ない心になっているのだとわ
かる。

日常生活の中で、日々のさ
まざまの出来事に関して、
「神さま、ありがとうござい
ます。」という単純な祈りこ
そは、神が喜ばれる祈りであ
り、だれにでもできることだ。
これは特別な能力とか資金、
あるいは運命といったものと
関わりなく可能である。それ
ゆえに、使徒パウロも次のよ

うに勧めている。

：いつも喜べ。絶えず祈れ。
どんなことにも感謝せよ。

これこそ神があなたの方に望ん
でおられることである。

(テサロニケ5の16、17より)

すべてのことにおいて感謝
する―これはもちろん私たち
にとっては著しく高い目標で
あり、現在これがいつも実行
できているというような人は
まずいない。キリストすら、

ゲツセマネの祈りにおいては、
感謝をすることなく、激し
い霊的な戦いに置かれ、血の
ような汗を流しつつ、「どう
か御心でしたらこの受けよう
としていたる苦難(十字架)を
取り除いてください。しかし
御旨のままに…」と祈られた
のである。

もし私たちがそのように神
を仰ぎ、神のなさるさまざま
のことに、たとえそれが苦し
くとも、きつと最善にしてく
ださると信じて感謝を捧げる
ときには、必ず良きことを起

こしてくださる。
それゆえに、この詩の最後
にもう一度、すでに語ったこ
とを繰り返して終わっている。

：感謝のいけにえを捧げる人
は、

私をあげる。
道を正しくする人に、私は神
の救いを見せよう。(23)

旧約聖書の続編()から

○：全能のゆえに、あなたは
すべての人を憐れみ、
回心させようとして、人々の
罪を見過ごされる。
あなたは存在するものすべて
を愛し、お造りになったもの
を何一つ嫌われない。
憎んでおられるなら、造られ
なかつたはずだ。
あなたが望んでいないのに存
続し、
あなたが呼び出されないのに
存在するものが

果してあるだろうか。

命を愛される主よ、

すべてはあなたのもの、あな
たはすべてをいとおしまれる。
(知恵の書11の23、26)

・ここには、深い神への信頼、
その愛への確信がある。

神の愛は万人に及んでいる、
そして救おうとされている。

人間だけでなく、この自然の
世界もすべて神が愛されるゆ
えに創造されたのだと。

○：(神の英知は) 人間を慈
しむ霊である。
神は人の思いを知り、
心を正しく見抜き、
人の言葉をすべて聞いておら
れる。

主の霊は全地に満ち、すべて
をつかさどり
あらゆる言葉を知っておられ
る。(同)

・神は全能ゆえにすべてを聞
いておられる。そしてつねに
その適切な報いを与えておら

れる。私たちも神の英知のほんのひとしずくでも与えられるとき、神とその創造された自然に聞く耳が与えられることを期待できる。

○いかに多くを語っても、決して語り尽くせない。

「主はすべてだ。」「このひと言に尽きる。(シラ書43の27)

(*) 旧約聖書の続編とは、外典(アポクリファ)とも言われる。ヘブライ語で書かれた旧約の部分を「正典」とし、紀元前3世紀にエジプトでギリシア語に訳された七十人訳聖書 Septuagintaのなかに追加されてある部分を「外典」という。

新共同訳では、続編という名称で続編付きの聖書として発行されている。キリスト教の最初の使徒たちの用いていた聖書は、ヘブル語の旧約聖書でなく、ギリシア語に訳された70人訳といわれる旧約聖書を用いていた。しかし、ルターが聖書をドイツ語に訳したときに、ヘブル語の旧約聖書から訳したため、プロテスタントでは、続編のない旧約聖書が一般的となっている。しかし、使徒たちが用いたものであり、二千数百年の歴史を越えて残されてきた書であり、こ

こに引用した箇所からもうかがえるように、聖書とほぼ同様な内容を持っている書が多い。

プロテスタントの聖書では続編を含んでいなかったため、その内容をよく読むことなく、続編を退けている人が多いが、正典とされている現在の旧約聖書のエステル書や雅歌には、神という語や信仰あるいは信頼という言葉が一度も使われていないのであって、とくにエステル書が引用されることはほとんど見かけない。それらより、はるかに続編の「知恵の書」(ソロモンの知恵)、「シラ書」(ベン・シラの書、あるいは集会書とも言われる。ベンとはヘブル語で子という意味であり、ベン・シラとは、シラという人の子という意味)などが、真理に満ちた内容であり、旧約聖書の箴言と共通の内容が多い。またマカベア書は、旧約聖書のダニエル書の理解には不可欠の書であり、旧約聖書から新約聖書の時代に起こった出来事を知るためにも必須の書である。

休憩室

夜明けの星

12月に入って、夜明け前に、東の空に強く透明な輝きを見せている星があります。木星です。

夕方には、金星が宵の明星として、強い光を投げかけているので、都会でもすぐに見つけることができるほどです。

まだ、しばらくの間は、宵の明星と、あたかも明けの明星の金星を思わせる二つの星を見ることができません。

このように、夕方も夜明け前にもともに、星空では最も明るい星を見ることができるとは、長い間なかったことです。

夜明け前、午前3時ころには、東の空から昇ってきて、数時間輝きを見せつつ、午前6時ころにはほぼ真南の空に著しい光を見せています。

12月20日ころは、月が見えているので、木星の輝きもそれほど強く感じられないのですが、クリスマス以降になると、月も細い三日月のようになり見えなくなっていくので、木星の輝きが一段ときわだつてきます。早朝の4時〜6時ころです。まだみんなが寝静まってい

る夜明け前のひととき、戸外に出て東天に黙して光の言葉を投げかけている木星、それ自体が一種の神の言葉です。広大な宇宙から、地球の私たちに向って何らの強制も副作もなく、ただ黙して輝いているその光は、天の国からの光を象徴しています。

お知らせ

第19回 冬季聖書集会

- ・ テーマ: 「光の中を歩もう」
- ・ 日時: 2017年1月7日 (土)〜9日(月)
- ・ 会場: 上郷(かみごう)・森の家 横浜市栄区上郷町1499の1
- ・ 電話 045-895-5151
- ・ 講師: 吉村孝雄
- ・ 会費: 大人19000円、学生5000円、日帰り参加10000円 (1日分)と食事代、食事代金は、昼食800円程度、夕食2400円。

参加費は、当日受付で支払う。
・割引：福島、長野以北、岐
阜以南の方々の会費は3000円
軽減。

・受付：13時30分

開会 14時 閉会は、19日の
13時。

○テーマ：光のなかを歩もう

○内容：聖書講話、早朝祈祷、
賛美タイム、感話、聖書・賛
美・祈り(ヨハネ2章)など。

今回は、自由時間を多く取り、
静まって祈り、あるいは自由
な交流がなされるように計画
されています。

○問い合わせ、申込先：小館

(こたて)知子

横浜市霧が丘3-22-1-501 携

帯電話 090-7183-1214

○会場(上郷・森の家)への
アクセス

京浜急行「金沢八景」からタ
クシーで10分ほど。料金は2
千円余。金沢八景へは、羽田
空港、品川、横浜から京浜急

行で行けます。金沢八景から
バスもありますが、バス停か
ら会場まで上り坂でゆっくり
歩くと15分ほどかかるので、
足に自信ある方以外はタクシー
をお勧めします。

JR大船駅から バスと徒歩
で1時間余り。北改札、笠間
口から出て、バスターミナル
神奈川中央交通3番バス乗り
場 神奈中バス(船08系統)
「金沢八景駅行き」ののつて
30分「森の家前」バス停下
車。徒歩10~15分。

全国集会の記録集

去る5月に徳島市で開催され
たキリスト教(無教会)全国
集会の記録集が発行されまし
た。すでに「いのちの水」誌
では、5月号からその主たる
内容を掲載してきましたが、
それらを一冊にしたものは、
「いのちの水」誌を講読して
ない方、あるいは個別に読ん

でいる人でも、一冊になつた
ものは全体の内容を知るには
好都合かと思われます。

購入希望者は代金(送料込)
500円を同封して申込くだ
さい。200円以下の切手で
の送付も可です。

元旦礼拝

来年1月1日早朝6時半から
の元旦礼拝は、例年どおり朝
6時半から徳島聖書キリスト
集会場にて行います。今年は、
元日が日曜日となり、10時
半からは通常の新年礼拝(主
日礼拝)があります。新し
い年の早朝に祈りをもつて始
め、自分だけでなく他者への
祝福を祈りたいと思います。
今年は、主日礼拝と同じ日な
ので、参加できる方はかぎら
れているかもしれませんが、
参加できる方々とともに祈り
を合わせたいと願っています。

徳島聖書キリスト集会案内

- ・場所は、徳島市南田宮一丁目1-47
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。
- (一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分
- (二) 夕拝 第一火曜と第三火曜、夜7
時30分から。毎月第四火曜日の夕拝は
移動夕拝。(場所は、徳島市国府町の
ちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川
宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南
町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて
開催)です。
- ・水曜集会：第二水曜日午後一時から集
会場にて。北島集会：板野郡北島町の
戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より)。
北島夕拝は第一水曜日夜七時三十分より)
- ・天宝宝集会：徳島市応神町の天宝宝
はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日
午後8時。
- ・海陽集会、海部郡海陽町の讚美堂・数
度宅 第二火曜日午前10時より)
- ・いのちのさと集会：徳島市国府町(毎
月第一木曜日午後七時三十分より、「いの
ちのさと」作業所)・藍住集会：第二
月曜日の午前10時より板野郡藍住町の美
容サロン・ルカ(笠原宅)・小羊集会
：徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院にて。
毎月第一月曜午後3時)・つゆ草集会
：毎月第4日曜日午後一時半。徳島大
学病院8階個室での集まり。・祈祷会が
第一回金曜日午前10時30分)・第四土
曜日の午後二時からの手話と植物、聖書

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)
郵便振替口座 〇一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送ってください。
(こたて)知子 いづれも郵便局で扱っています。 E-mail: pististry12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集会」)